

ドキドキわくわく あたらしい本 えほん

2023.4

ぼくとクッキーのなかなおり

かさいまり 作・絵
ひさかたチャイルド

なかよしのクッキーとけんかした。
さっきまでのしかったのに、ともだ
ちだったのに、いまはちがう。あした
クッキーとあそぶやくそくをしてたけ
ど、いいもん！ひとりだってあそべ
るし。でも…。

なかなおりのほうほうはことばだ
けじゃないとおしえてくれるえほん
です。

こねこのはなしではないおはなし

ランドール・ド・セーヴ 作
カーソン・エリス 絵 石津ちひろ 訳
Gakken

くるまのしたにいたのは、よごれ
ていて、はらぺこで、ひとりぼっち
で、さびしそうにニャーニャーないて
いて、おうちがひつようなこねこ。ご
きんじょさんたちはみんなでこねこを
たすけようとしています。

これはこねこのはなしではありま
せん。やさしさについておしえてくれ
るおはなしです。

低学年

ぞうのフニフとわにのワムくん

はせがわさとみ 作・絵
佼成出版社

ある日、風がふきました。すると風はお
ちばをまき上げ、くるくる舞い上がり遠く
へとんでいきます。それを見たぞうのフニ
フは、「ねえ、風はどこからくるんだろ。」と
わにのワムくんに言いました。

するとワムくんが「風のかくれ家をさが
してみるひつようがあるとあるね」と言ったの
で、ふたりは「風のかくれ家」をさがすぼう
けんに出かけました。

「風はどこへ？」のほか3編がはいっ
た、なかよしな2匹の短編集です。

森のポストをあけてごらん

山中真理子 作 こがしわかおり 絵
ポプラ社

がくさんは、はいたつのしごとをしてい
ます。ある日、すもも村、森の一番地の
大木さんのところへにもつをとどけること
になりました。

森の中へはいっていくと、太いカシの
木にポストがとりつけられていました。で
もにもつははいりません。そのとき女の
子に声をかけられ、大木さんのいえまで
いくことになりました。そのポストにはは
っぱがはいっていて、木からのてがみだ
とおんなのこはいうのですが…。

ブックキャット
ねこのないしょの仕事！ポリー・フェイバー 作
クララ・ヴリアミー 絵 長友恵子 訳
徳間書店

ネコのモーガンは、戦争のさなかに、イギリスの都市ロンドンの地下鉄のホームの下で生まれました。けれどもまもなく、お母さんと妹は、飛行機から落とされた爆弾によって死んでしまいます。

ひとりぼっちになったモーガンは、おなかがいっぱい、バナナをぬすみ、たくさんの人間に追いかけて、近くの建物の部屋のなかになにげこみます。そこは、『フェイバー・アンド・フェイバー社』という出版社。その日から、モーガンは、ここで「ブックキャット」としてはたらくようになりました。

「ブックキャット」って何をするネコ？

ウィリアムの子ねこマージョリー・フラック 作・絵
まさきるりこ 訳
徳間書店

ウィリアムは、まいごになっている子ねこをみつけました。その子ねこは、ぎゅうにゅうやさんやゆうびんはいたつのひとなどについていきましたが、みんないそがしくて気にしてもらえませんでした。でも、4さいのウィリアムはいそがしくなかったで、その子ねこにこえをかけ、お母さんにそうだんをして、子ねこをけいさつしよにとどけることにしました。けいさつしよにいくと、まいごのねこのとどけでをしているひとは、3人いました。しよちょうさんが、その人たちにでんわをすると、3人ともうちの子ねこだといい、すぐにけいさつしよにみにきました。

高学年以上

あずきの絆

ほくが図書室で出会った妖怪

高森美由紀 作
岩崎書店

小学五年生の佐々木蓮は、こわい話や不思議な話の本を読むのがだいすき。いつも学校の図書室で、本を借りている。

ある時、蓮が前から図書室で借りようと決まっていた『こわい話 妖怪編』を手にとると、ページの間から出てきたのは、生のあずき。不思議に思いながらも、そのあずきをポケットに収めての帰り道、蓮は川にかかる赤音橋の下から妙な音と声を聞いた。それは、何かを洗う音と「あずき洗おか 人取って食おか」という声。

家へ帰って、本の目次から【小豆洗い】をさがして読むと、それはまさに、今日聞いたことだった。人間と妖怪のふれあいのお話。

雪の日にライオンを見に行く志津栄子 作 くまおり純 絵
講談社

中国残留邦人の祖父を持つ唯人。中国で生まれた唯人の父は、日本で母と結婚したが、唯人がおさないころ、一人で帰国してしまった。それ以来、唯人は母と二人でくらしている。何をするにも自信がなく、話すのも苦手な唯人を、近所に住む従兄の洋平がいつも助けてくれていた。だが、五年生になって初めて洋平とクラスが分かれてしまい、唯人は心細い思いをしていた。

そんな唯人のクラスにある日、梓が転校してきた。クラスのみんなが話しかけても、梓はそっけない返事ばかりでなじもうとしない。まるでバリアをはっているような梓を、唯人はなぜか放っておけなかった。